[取材]

自ら考えることのできる授業を心がけて

徳島大学病院循環器内科
赤池 雅史 あかいけ まさし

「まず自分で考えてもらい、わからないところを教えるようにしています。そうすると理解しやすいんです」

と語る赤池先生は、1985年徳島大学を卒業。大学病院や関連病院での臨床経験をもとに、少人数で、実際の患者さんの情報を使いながら学生が自ら考えていく授業を展開。受講生からは、わかりやすい、実際に役立つと好評です。

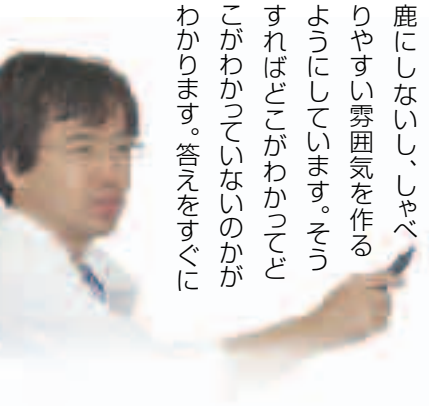
「ここまでの情報からどう考えるか。次にどうすればよいか」と学生に問いかけながら、「どんな（間違った）答えが出てきても怒ったり馬鹿にしないし、しゃべりやすい雰囲気を作るようにしています。そうすればどこがわかってどこがわかっていないのかがわかります。答えをすぐには教えません。時間はかかりますが、そのほうが深く理解できるし、患者さんの持つ問題点を自ら解決できる力がつきます。だから初めから一方的に教えない方が良いんですね」

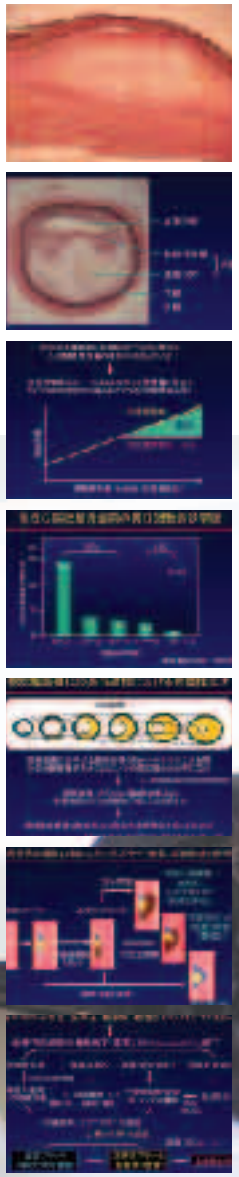
そこにはマニュアルにはない、ハウツーだけではない生き生きとした授業があります。また実際の患者のデータを使うことにより、授業にリアリティがあります。

「学生にはこれまでに学んできた自分の知識や経験を総動員して、患者さんのことを一生懸命考えてもらうんです。将来、臨床の現場で自ら考え、自ら学習できる力を持った医師に少しでも近づけるように」

授業の仕上げにはスライドを使って、その患者さんの病態に関係した内容を系統的に解説します。

「教師と生徒の関係ではなく、教えるためには自分も臨床医として研究者として、日々、成長していけるようにがんばらなければなりません」





徳島大学の教育力
魅力ある授業

受講生のコメント
実際の症例や図解がいろいろあり、臨床につながる授業です。0から飛ばすことなく教えてくれるので、前に勉強して忘れていたことも思い出せますし、質問形式や理論的で興味を持ちやすくわかりやすいです。

夏号特集「地域に活きる」を読んで

●地域連携の活動状況が十分理解できた。また研究室レベルでの地域貢献活動も活発にやっておられるのだと理解を深めることができた。

●「交流プラザ」自体が地域に活きるようにさせて頂いている。つまり、地域に活かされていることになる。この気持ちは大切な考えである。

●もう少し、地域の人が徳大に何を期待しているのか知りたかった。

●具体的な地域連携事業を一つ二つ大きくとりあげたら、いろいろな読者に分かりやすいのではと思いました。理念の記述はそこそこで。